

まりが定常的に保たれ、音声は頻繁に用いられる必要性も低いと考えられる。今後は、金華山で季節による違いやなきかわしのネットワークを調べ、2地域の変異性についての理解を深めたい。

計画4-3:

飼育チンパンジーの社会行動

松村秀一(京都大・霊長研)

本研究は、集団飼育下におけるチンパンジーの社会行動を、とりわけ社会的緊張の緩和という視点から考察することを目的とした。今回は、1990年8月に、三和化学熊本研究所霊長類センターにおいて、2つのグループのチンパンジーの社会行動の観察をおこなった。そして、1988年10月に同様の観察をおこなった結果との比較を試みた。

Aグループは、前回の調査時からオスメス1頭ずつが取り除かれ、メス1頭が加わり、オトナ(10才以上)のオス2頭メス5頭計7頭で構成されていた。Bグループは、オスメス1頭ずつが取り除かれ、コドモ(5才7カ月から6才1カ月)が3頭加えられ、オトナのオス2頭メス3頭とコドモ3頭の計8頭で構成されていた。

データの分析の途中ではあるが、結果の概要について報告する。

両グループともにオトナオスが3頭から2頭に減ったため、前回に比べて敵対的交渉の頻度が全対的に低下した。また、敵対的な交渉の後に見られた「和解」行動の多様さも低下した。

Bグループにおいては、コドモの絡んだ敵対的交渉が頻発し、全体の半数以上を占めた。コドモの絡んだ敵対的交渉の後には、「和解」行動があまり見られなかった。また、「和解」直後に敵対的交渉が再発するという例もあった。これらは、社会的な緊張を緩和する行動が、コドモにはまだ十分に身につけていないことに起因するように思われた。

今後、個体間の空間的近接や、親和的な交渉のパターンなどのデータの分析を進め、様々な社会行動の機能について明らかにしていきたい。

計画4-4:

アカゲザルの攻撃的社会相互作用における集団間変異

松村澄子(山口大・医短)

アカゲザルの集団内における攻撃的社会相互作用(攻撃の音声、行動、闘争当事者への第3者による介入のパターンなど)の集団間変異を比較することを目的として、昨年度は霊長研アカゲザル放飼群のうち、中国華群について、2週間、1日4時間の観察、音声と行動メモの録音を行い、ソナグラムによる音声解析を行った。

今年度は霊長研アカゲザル放飼群のインド群について同様な方法によるサンプリングと解析を行った。

現在までに解析を終えた結果について報告する。攻撃的音声のうち、Screamにはソナパターンにおいて、1)雑音型、2)変調型、3)純音型の少くとも三型が区別された。1)は最も激しい攻撃行動中の個体や、不意に攻撃を受けた個体によって発せられる最も著しい攻撃情動を示す音声で、個体差はきわめて乏しく、両群間での差は認められなかった。また2)は中国華群で報告したように、群れの中の下位で老齢の母ザルによって自分の子への攻撃の機先を制する目的や、Redirectionに伴って発され、信号性がきわめて高いという点は共通していた。一方、攻撃的音声の威嚇音については、中国華群に比べると、インド群での方が強く、明瞭に発声され、使用頻度が高い傾向が見られた。

サンプルには更に詳しい解析が必要で、両群について揃った段階で、考察を行う予定である。

課題5

計画-5:1

サル認知機能の分析-多形概念に基づく人工図形の弁別

実森正子(千葉大・文)

サルやハトを被験体とした視覚的概念弁別実験では、多数の写真刺激を用いても弁別は速やかに獲得され、また新しい多様な刺激に対してもほぼ完全な転移がみられることから、多形概念に基づいた弁別が行われていると考えられている。多形概念とは、刺激クラスを規定するM個の特徴のうち、どの様な組み合わせでもそのうちのN個以上を含んでいればそのクラスの成員とみなすというもので、成員性を規定するのに必要または十分な固有な特性は存在しない。今回はTwo-out-of-